



札幌市医師会
めばえこどもクリニック

有岡 秀樹

世代という概念は単なる人口の年齢帯を指すものとしてよりも、出生、成長の時期を同じくしたことによって歴史的体験を共有した人々、つまり同時代人を指します。昭和の大先輩の世代から今日まで、世代の変遷をたどってみたいと思います。

① 昭和一桁世代（1920年後半～1930年前半に出生した人々）

日中戦争が勃発して戦時体制に移行し始めた時代です。この時代に生まれた人々は第二次世界大戦の戦時体制に少年時代を送りました。1929年以前に生まれた人の多くは、兵士として戦地へ動員されました。終戦後は戦後復興の担い手となり、さらに高度経済成長の序盤を支えました。この時期に「三種の神器」と呼ばれた白黒テレビ・洗濯機・冷蔵庫を買いそろえた人が多かったようです。1990年代に定年退職を迎えた世代ですが、戦争と、その後に続く高度経済成長という完全に文化面や社会面での連続性が途切れてしまった時代を経験した、貴重な生き証人として活躍されてきました。

② 焼け跡世代（1935年～1946年までに出生）

語源は野坂昭如が用いた「焼け跡派」です。都市部のこの世代の人々は、戦時中は防空壕と焼け跡の中で過ごし、飢餓や経済的困窮など戦争被害に苦しみました。父親を戦死や戦災で亡くし、母子家庭での生活を強いられた者も少なくありません。少年期に大日本帝国憲法が廃止され、日本国憲法が施行されました。軍国主義教育と敗戦後の民主主義教育の両方を経験した、第二次世界大戦の記憶を持つ最後の世代です。

③ 団塊の世代（1947年～1949年に出生）

語源は堺屋太一の小説「団塊の世代」に由来しています。日本における第一次ベビーブームが起きた時期に生まれた世代を指します。その背景としては、戦後に出産が増えたことだけではなく、終戦に伴って若い男性が復員し、婚姻が急増したことが考えられます。大学に進学したインテリの若者たちはいわゆる学生運動と呼ばれた「大学改革」や安保闘争、ベトナム戦争反対の反体制運動に身を投じました。しかし東大紛争が敗北に終わり、70年安保闘争も不調に終わると多くの若者が学生運動から離れていきました。追い込まれた過激派の暴力行為がエスカレートし、あさま山荘事件や内ゲバ事件が起きました。

その後急速に学生運動離れが進み、ほとんどの団塊世代の若者は企業戦士に転向しました。振り返ってみれば、大きな人口構成で日本の経済大国化を担ったこの世代は、生産者としても消費者としても突出しており、そのパワーで日本を世界第二位の経済大国に押し上げました。

④ しらけ世代（1950年～1964年に出生）

日本の学生運動が下火になった時期に成人を迎え、政治的無関心が広まった世代を指す言葉です。オイルショックが起きて高度経済成長が終わり、あさま山荘事件が起きて学生運動が急速に衰えると、一つの時代が終わった無力感と学生運動への失望を背景に「しらけ」という言葉が若者の間で流行し、「無気力・無関心・無責任」の三無主義を中心とする風潮が見られました。政治的な議論には無関心になり、個人主義に徹する傾向が強くなりました。「四畳半フォーク」など、個人生活優先・モラトリアムの傾向に続いて1970年代末期になるとブランド志向の風潮が芽生え始めました。アニメやコンピューターゲームの業界が急速に発展しました。

⑤ バブル世代（1965年～1970年に出生）

生まれた時期は高度経済成長の後半で、ベトナム戦争の真っ只中でした。中学高校時代はツッパリ文化が最盛期で、校内暴力事件が戦後最多を記録しました。大学入試などの競争が徐々に激しくなった世代でもあります。就職期はバブル景気で日本の景気が極めてよく、各社事業を拡大展開すべくこぞって人員募集数を拡大しました。しかし1991年のバブル崩壊による不況が始まり、さらに1997年の消費税増税により景気後退が加速しました。一部の正社員は派遣社員やフリーターに転落しました。この後2005年までは就職氷河期と呼ばれ、雇用環境が厳しい時代が長く続きました。

⑥ さとり世代（1990年前後に出生）

2013年の流行語大賞にノミネートされた言葉です。この世代の特徴は「欲がない」「恋愛に興味がない」「旅行に行かない」などが指摘されています。この世代は不況の日本しか知りません。インターネットネイティブでもあり、情報が豊富で、無駄な努力や衝突は避け、俗な意味での「合理性」を重視する傾向があります。また、これまでの消費に重きを置く社会から、精神的な豊かさや幸福感への移行期における、新しい価値を模索している世代ではないか、との指摘もあります。

ここまで世代の変遷をたどってきましたが、各世代の人々が歴史的、政治的、経済的背景によって、ある意味で翻弄されてきた、ということが理解できると思います。現世代は過去の世代の恩恵を少なからず受けています。次の世代に何を伝えるべきか、を考えるきっかけになればと思います。